

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



17

よろこびの知らせ
第17集

目 次

救いの道	1
ローマ 3:21-26	
キリストによる解放	10
ローマ 6:20-23	
神との和解	19
ローマ 5:6-11	
告白の力	28
ローマ 10:9-10	

ここに収められたメッセージは、2020年1~3月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

救いの道

ローマ 3:21-26

3:21 しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。

3:22 すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。

3:23 すべての人は、罪を犯したので、神からの榮譽を受けることができず、

3:24 ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。

3:25 神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。

3:26 それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。

古代のローマ帝国は、ヨーロッパの中心でした。その文化、法律、制度は今も残っています。身近なものでは、ラテン文字は日本では「ローマ字」と呼ばれています。また、IとVとXを組み合わせた「ローマ数字」は時計などで使われています。「ローマ」が入ったことわざもいくつかあります。「ローマは一日にして成らず（Rome was not built in a day.）」「ローマに入りてはローマに従え（When in Rome, do as the Romans do.）」「すべての道はローマに通じる（All roads lead to Rome.）」などです。

聖書にも「ローマ人への手紙」があります。そこには、ローマに至る街道が舗装され、整えられていたように、救いの道が論理的に整った形で書かれています。それは “Romans Road to Salvation” と呼ばれ、これにはローマ 3:23、6:23、5:8、10:9-10、10:13 の五つの箇所が選ばれています。きょうはその最初の、ローマ 3:23 を学びます。

一、創造者である神

ローマ 3:23 は、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」と言って、私たちに罪からの救いが必要であることを教えています。しかし、いきなり、「罪」とか「神からの栄誉」と言われても、聖書を学んだことのない人にはなんのことか分からないでしょう。その場合は、ローマ 1:20 から始めるとよいでしょう。「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」ここには、神が創造者であり、神はご自分が造られた世界を通して、ご自身を示しておられ、私たちは神を否定することができないと書かれています。私たちに神を正しく伝えてくれるものは、なによりも聖書ですが、神が造られたこの世界もまた、神がどんなに偉大なお方であることを示し、神が決して木や石に刻み、どこかに収めておけるようなお方ではないことを教えています。詩篇に「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。昼は昼

へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた」（詩篇 19:1-4）とある通りです。

日本では高い山があると、それを神として拝んできました。たいていの川は山から流れ出て田畑を潤すので、農耕民族にとって山は自分たちを生かしてくれる神そのものだったのです。しかし、創造者である神を知る人々は、山を見上げる時、その山を造られた神を思い見て、神に信頼を寄せました。詩篇 121:1-2 に、こう歌われています。「私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。」すべての物を造り、あらゆる物を治める神だからこそ、私たちを守り、助け、救うことが出来るのです。私たちを救うお方は、じつに「天地を造られた」創造者である神です。

人々はかつてはさまざまな物を神々として拝み、そこから「神話」が生まれました。今では、「神話」をそのまま信じる人はいなくなりましたが、かわりに「科学」をそのまま信じるようになりました。「科学的にはこうだ」と言われると、それが本当かどうかを確かめずに鵜呑みにしてしまうのです。“Scientifically Proven”とか“Doctor Recommended”などという言葉を使うと商品が良く売れるのはそのためです。「科学信仰」「科学崇拝」あるいは「主知主義」が人々に創造者である神を見失わせています。そのひとつが進化論です。進化論では世界

は最初小さな物質の塊であったが、それが爆発し、そこから星が生まれた。その一つが太陽で、この太陽の3番目の惑星に地球があった。地球はたまたま太陽からほどよい距離にあり、自転しながら太陽のまわりを回るようになった。地球に「月」があるために海に潮の満干ができ、海の水が腐敗せずに済むようになった。その海から最初に単純な生命体が生まれ、そこからより複雑な生命体へと変化し、最終的に人間が生まれた。今日の世界は、偶然と偶然とが重なって出来たものだというのが進化論です。進化論では宇宙は138億年前に始まり、20万年前に人類が生まれたと言います。何億年という長い時間があれば、無生物から生物が生まれ、単純な細胞から知性も意志も感情も持った人間が出来ても不思議ではないというのです。しかし、進化論は仮説にすぎず、数多くの矛盾があります。ところが、人々は、あたかも進化論が証明された事実であるかのように信じ、創造者である神を締め出しています。

しかし、神を締め出したなら、人は、自分が生きている意味を見失います。進化論では、私たちは偶然の産物で、偶然ここにいるだけで、人生には何の意味も、価値も、目的もないからです。アメリカの独立宣言には「すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている」とあります。アメリカは創造者である神への信仰に基づいて建てられた国家です。創造者である神を信じなくなったなら、人々の自由や平

等が失われます。力のある者が力のない者を思いのままにしてもよいことになってしまいます。創造者である神を知らないこと、また、神を信じないことは、自分を不幸にするだけでなく、社会をも惨めなところにしてしまうのです。

二、神に対する罪

神は、その全知全能のお力によってこの世界を創造されましたが、同時に、人間を神とコミュニケーションができる特別な存在としてくださいました。自然界に法則を定めてくださった神は、神と人との間にも信仰と道徳の法則を定め、人がそれに従うとき、最も幸せになれるようにしてくださいました。ところが人は、まことの神を捨て、神ならぬものを神として礼拝するようになりました。ローマ 1:21-23 に、こう書かれています。「というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」人々はさまざまな形の偶像を作りましたが、自分たちが作ったものが神であると本気で信じていたわけではありません。自分たちが従わなくてもよい神々、自分の思い通りになる神々を作り出したのです。人間が神を作り出すことによって、神の上に立とうとしたのです。神と人間との関係を逆さまにしてしまったのです。神と人との関係が逆さま

になれば、人と人との関係も逆さまになり、壊れていくのは当然です。そして、それが社会の秩序を逆さまにし、壊れていくのです。現代社会は、人々がどんどん神から離れ、社会が急速に壊れています。私たちは今、それを見えています。

ローマ 1:21 に「神を神としてあがめず、感謝もしない」とありましたが、ここに人間の罪があります。聖書は、直接神に向かう罪を教え、また、どんな罪も、それを「罪」と定めた神に対する罪となると教えています。皆さんも、まことの神を知らなかった時、良心が痛むようなことをしてしまったとき、「どこかで神が見ておられる」と感じたことはありませんでしたか。自分のしたことが神に対する罪なのだということを心のどこかで感じませんでしたか。それは、神がすべての人に神を求める思いを与え、神の戒めをその良心に書き込んでおられるからなのです（ローマ 2:15）。たとえ聖書の言葉を知らなかったとしても、人はその良心に刻まれた戒めによって、神に対する自分の罪を知らされていたのです。

三、罪からの救い

すべての罪には罰が伴います。交通違反をすれば罰金を払わなければなりませんし、重い罪であれば実際に刑務所に行かなければなりません。同じように、神に対する罪にも刑罰が伴います。聖書ではそれは「さばき」と呼ばれています。私たちは誰も、神が正しい「さばき」を行われることを知っており、また、それを期待しています。もし、私たちに損害を与えた者が何の罰も受けな

かったら、きっと納得できないでしょう。人間が裁けないのなら、神に正しいさばきをして欲しいと願うでしょう。私たちは神に正義を求め、さばきを願うのです。ところが、自分のこととなると、さばき行ふ神は嫌だと言うのです。確かに誰も「さばき」などといった厳しい言葉は聞きたくありません。しかし、聖書は私たちを脅すために「さばき」を語っているわけではありません。私たちをそこから救うために「さばき」について語り、神が人をさばくだけの神ではなく、愛と、いつくしみと、忍耐と寛容の神であり、私たちを悔い改めに導びこうとしておられることを教えています（ローマ2:4）。

実際、神は、ご自分のさばきを曲げることなく、私たちの罪を赦す道を作ってくださいました。私たちに向けられるさばきが、誰か他の人に向けられ、代わりに私たちが罪の赦しを受けるという方法です。そして、その「誰か他の人」が、神の御子イエス・キリストです。罪のないお方が、私たちが受けなければならない「さばき」を受けてくださり、私たちはそれによって赦されました。そして神は、自分の罪を認めた者を「義と認めて」くださると定めてくださいました。何の罪も犯したことの無い者とみなすだけでなく、神の栄誉、つまり、神の子どもとしての身分、神の愛、永遠の命を与え、永遠の神の国を受け継ぐ資格をも与えてくださったのです。

もし、聖書がローマ3:23で終わっていたら希望はありません。しかし、続く24節があります。23節と24節はもともと一つの文章ですから、一緒に読んでみましょ

う。「すべての人は、罪を犯したので、神からの榮譽を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」イエス・キリストの救いの範囲は「すべての人」、その原因は「恵み」、救いの方法はイエス・キリストの贖い、つまり、十字架と復活です。救いの手段は「価なしに」、つまり、信仰によってイエス・キリストが成し遂げてくださった救いを受け取ることによってです。具体的には、26節に「イエスを信じる者を義とお認めになるため」とあるように、イエス・キリストを救い主として受け入れることによってです。それ以上でもそれ以下でもありません。

人々が神を否定しようとするのはなぜでしょうか。良心が責められ、神のさばきを恐れるからです。神がいなければ、罪もなく、さばきもなくなると考え、神を締め出そうとしてきたのです。しかし、そこにはたましいの平安も満足もありません。私たちは神のない教育を受け、神のない生活をし、神のない社会を作り、神なしに世を去っていくだけの人生を送るだけで終わってしまいます。救いへのただひとつの道は神を認め、自分の罪を認め、イエス・キリストを救い主として受け入れることです。そのとき、さばきは取り除かれ、私たちは義と認められ、たましいは神の平安で満たされます。これが、聖書の教える「救いの道」です。きょう、その一步を踏み出しましょう。すでにその一步を踏み出した者は、この救いの道を歩み続け、この救いの道に人々を招こうで

はありませんか。

(祈り)

父なる神さま、きょうは、聖書が教える「救いの道」の第一歩を学びました。これを知ったすべての人が、そこに向かって信仰の第一歩を踏み出すことができますように。この道を歩んでいる私たちが、より多くの人をこの道に招き、ともにこの道を歩み続けることができますように。救い主イエス・キリストの御名で祈ります。

キリストによる解放

ローマ 6:20-23

6:20 罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。

6:21 その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。

6:22 しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。

6:23 罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

一、神の基準

「救いの道」の第一番目の聖句はローマ 3:23、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」でした。このような箇所を示すと、「私は善良に生きてきたし、私のまわりにも良い人は一杯いる。

『罪、罪』なんて言わないでほしい」と言って反発されるかもしれません。確かにほとんどの人は、犯罪に手を染めたことはありませんし、道徳的にもそんなに問題のない生活をしているでしょう。しかし、聖書が「罪」というとき、それは「犯罪」や「不道徳」だけでなく、人の心の中にある罪の性質と、そこから出てくるものの考え方やものごとに対する態度、また生き方のことも指しています。しかも、他の人や社会に対するものだけでなく、神に対する心のあり方、態度、実際の行いが問われるのです。なぜなら、私たちはみな神によって造られた者であり、造り主である神に対して責任があるからで

す。「すべての人は、罪を犯した」という言葉に「神に対して」という言葉を加えて考えてみれば、「すべて」の中に自分が含まれていることが分かるでしょう。

「神からの栄誉を受けることができず」という部分は英語では“short of the glory of God”と訳されています。

「神の栄光に足りない」、つまり、神が人間に求めておられる基準に届いていないという意味です。神は、私たち人間を、どんなものよりも素晴らしく造ってくださいました。詩篇 8:5 に「あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました」とあるように、人間は神に最も近い存在なのです。ですから、神は、人にそれにふさわしい基準を求められるのです。

造り主である神を認めない人々は、人間は進化の過程で、たまたま出現した生物であると言いますが、そうなら、人間は他の動物と何も変わらないものになってしまいます。けれども、誰もが人間は他の動物とは違うということを知っています。人間としての尊厳を守り、人間としての幸福を求めて生活しています。神を信じない人々は、神がお与えくださった基準を引き下げたり、取り払ったりして、罪を罪でなくそうしてきました。そして、罪を罪とは呼ばず、「病気」と呼ぶようになりました。罪を犯しても、それは罪を犯した人に責任はない、DNA がそうさせたのだからと言うのです。神が定めてくださった基準を引き下げたり、それを取り去ったところで、罪が罪でなくなるわけではありません。そうす

ることは、人間を神の栄光から遠ざけ、自らを卑しめ、人間を人間でなくすことでしかないのです。聖書が「罪」を語るのは、人間が罪から解放されて、神が人間に与えてくださった栄光に立ち返るためなのです。

二、罪の束縛

今、「罪から解放されて」と言いましたが、罪は人を束縛するものです。イエスはヨハネ 8:34 で、「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です」と言っておられます。

罪が人を束縛することは、アルコール依存症を例にとってみればよく分かります。アメリカでは 1400 万人にアルコール依存の問題があり、患者として診断されている人が 800 万人いると言われています。人がアルコール依存症になるのは、その心に解決されていない不安があるからです。それを正面から解決しようとしなくてアルコールによって一時逃れをします。しかし、アルコールは不安を解決するどころか、さらに不安をふくらませます。それで、もっと多くのアルコールを飲むようになり、やがて、アルコールが原因で暴力をふるったり、仕事を休んだりするようになり、身も心も病気になります。

そんな家庭では、奥さんや子どもが、夫や父親のしたことの後始末をし、夫や父親をかばおうとします。たとえば、暴力をふるわれても我慢する、飲み過ぎて起きられないとき、会社に「きょうは風邪なので休みます」と代わりに電話するなどです。アルコール依存の人の家族

は、アルコール依存の人を支えることを「生きがい」にし、アルコール依存の人と同じような考え方や生き方をするようになります。これを「コ・ディペンデンシー」（共依存）と言い、それは「人間関係の依存症」と言ってもよいものです。その結果、家族関係が不健全なものになり、不健全な家族関係が親から子へと引き継がれてしまうのです。

私は、こうしたことを「アルコール依存症者の家族の会」と一緒に勉強しました。日本語のグループのためにさまざまな資料や、365日のデボーションを翻訳しました。依存症には、他にもギャンブル依存症、買い物依存症、また過食症や拒食症、そして「怒りの依存症」などがあるのですが、そうした依存症の根底には、神を認めず、自分の罪を認めず、神の恵みを受け入れようとしない心や態度、また生き方があることが分かりました。依存症は罪から来ること、罪が人を束縛し、奴隷にするものであることを、改めて確認することができました。

こんな話があります。あるところに、とても腕のよい職人がいました。彼が作る鉄の鎖はとても丈夫で誰も壊すことができない完璧なものでした。完璧なものを作ることができる人は、他の人が作ったものの欠陥を見破ることができます。それで、彼の手にかかれば、他の人が作った鎖は、すぐに壊されてしまうのでした。ある日、この職人が酔っ払って乱暴を働きました。それで、牢屋に鎖で繋がれました。酔いが覚めて、自分が鎖で繋がれているのを知ったこの職人は、こう言いました。「俺を

鎖で繋いだって無駄さ。こんなものはすぐに壊してみせる。」彼は鎖の輪のひとつひとつを指で触って、その欠陥を捜しました。そのうち彼の顔が青ざめてきました。そして、叫びました。「なんてこった。この鎖は壊せない。完璧に作られている。これは、俺が作った鎖だ。」人は、自分が犯している罪によって自分を縛っているのです。自分が作った完璧な鎖で自分を縛っており、自分の力ではそこから逃れることができないのです。

三、キリストによる解放

このように罪に束縛された状態を、聖書は「罪の奴隷」と呼んでいます。罪は人を奴隷にします。奴隷には人権がありません。奴隷は死ぬまで働かされます。罪という「主人」に仕えて、いくら働いても、得られる報酬は「死」です。私たちの人生がそのようなものなら、なんと惨めではありませんか。しかし、私たちは「罪の奴隷」でいる必要はないし、「罪の奴隷」のままではならないのです。なぜなら、そこからの解放があり、回復があるからです。

聖書はこのことを早くから預言していました。イスラエルの「出エジプト」は罪からの解放を示すものです。イスラエルはエジプトで奴隷でした。来る日も来る日も炎天下でレンガづくりの重労働に駆り立てられていました。神は、このイスラエルの苦しみをご覧になって、彼らをエジプトの奴隷から解放し、ご自分の民にしようとされました。神はモーセを遣わしましたが、エジプトの王、ファラオはイスラエルを解放しようとはしませんで

した。しかし、神は、そのお力によってファラオを懲らしめ、ついにイスラエルは奴隷から解放され、自由な者となりました。自由な民となっただけでなく、神の民、神の選びの民とされたのです。「出エジプト」は、やがて、神が、キリストによって、人を罪の奴隷から解放してくださることを預言し、約束するものだったのです。

イスラエルの「捕囚からの帰還」は、罪の結果からの回復を示しています。出エジプトによって神の民とされた人々は、神の祝福を受けて、外敵から守られ、繁栄するのですが、やがてその恵みを軽んじ、神に逆らいました。そのため王をはじめ、主だった人々が皆、バビロンに連れ去られ、神殿さえも壊されました。これを「バビロン捕囚」と言います。しかし神は、人々が悔い改めた時、バビロンの捕囚から解放し、人々を自分たちの土地に帰し、神殿を建て直させてくださいました。このことは、回復の時が来るという約束であり、人々に救い主を待ち望ませるものとなりました。

いったん罪の奴隷となったら、もう自分の力では自分を解放することはできません。しかし、人には出来なくても、神には出来る。キリストと呼ばれる救い主が来て、人々を罪の奴隷から解放し、罪の結果から回復させてくださる。旧約はこのことを預言し、新約は、救い主イエスが来て、私たちに解放と回復を与えてくださったことを告げています。

「ローマ人への手紙による救いの道」の第二番目の聖句は、6:23 ですが、キリストによる解放と回復を教えて

います。「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」先程、奴隷は死ぬまで働かされると言いました。奴隷の報酬が「死」であるように、罪の報酬も「死」です。「報酬」とあるのは、罪の結果は必ず受け取らなければならないからです。ここで言う「死」は、からだの死だけでなく、たとえからだが生きていても、その霊やたましいが神のいのちから遠く離れ、人生を喜びと平安をもって生きることができないという霊的な死のことであります。

しかし、罪の奴隷から解放されたなら、「死」の「報酬」を受ける必要はありません。「永遠のいのち」が「賜物」として与えられるのです。永遠のいのちが「報酬」と言われていないことに注意してください。誰も、どんなものによっても、「永遠のいのち」を勝ち取ることはできないからです。「永遠のいのち」にふさわしい行い、働きなど、罪の奴隷である者にはとうていできません。それは、神がくださる「賜物」、「ギフト」であって、無代価で受け取るべきものです。

かつて、奴隷は品物のように売り買いされましたから、奴隷には値段がつけられました。それで、奴隷が解放されるためには「贖い金」といって、それぞれの奴隷の価値に似合うものが支払われなければなりません。そして、そのように代価を払って奴隷を自由にすることは「贖い」(redemption)と呼ばれました。この言葉は、聖書では、イエス・キリストの救いを表すのに使わ

れています。キリストが、私たちが贖ってくださったというのは、罪の奴隷である私たちに自由を与えるために、代価を払ってくださったことを意味しています。その代価は、いったいどれほどのもののでしょうか。ミリオン・ドラーでしょうか。ビリオン・ドラーでしょうか。いいえ、そんなものではありません。それは、どんな値段もつけることができない、キリストのいのちでした。イエスは「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません」と言われました。私たちひとりひとは、全世界のあらゆるものよりも価値があるのです。イエスは「そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう」（マタイ 16:26）と言われましたが、イエスが、私たちが買い戻すために差し出してくださったのは、ご自分のいのちでした。神は、私たちが、キリストのいのちに等しいほどの価値あるものと認めてくださっているのです。

「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」このことは、キリストの十字架と復活によって成し遂げられました。イエス・キリストの十字架が私たちが罪から「解放」し、復活が、私たちが罪の結果から「回復」してくれるのです。キリストのいのちという、どんな値段もつけられない価値あるものによって、私たちは、私たちの価値を取り戻します。キリストを信じる時、そのキリストのいのち、つまり永遠のいのちを受

けます。このいのちによって私たちは、罪から解放され続け、罪の結果から回復され続けながら、新しい歩みをするようになるのです。キリストによる、この解放、この回復を、信仰によって受け取り、日々に体験して歩もうではありませんか。

(祈り)

父なる神さま、あなたは、私たちが罪の奴隷から贖い出すために、ご自分の御子さえも惜しまれませんでした。あなたはそれほどに私たちを価値ある者とし、愛してくださいました。イエス・キリストの十字架には、なんと大きな愛が満ちていることでしょうか。その愛を受けながら日々を過ごすことができるよう、私たちを導いてください。イエス・キリストのお名前です。

神との和解

ローマ 5:6-11

5:6 私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。

5:7 正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。

5:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

5:9 ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

5:10 もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。

5:11 そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。

きょうは“Romans Road to Salvation”（ローマ人への手紙による救いの道）の三番目の言葉、ローマ 5:8 をとりあげます。ここには、「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます」とあって、キリストの救いによって、私たちにもたらされるものが教えられています。それは、「神の愛」、「神との和解」、そして「喜びの生活」です。

一、神の愛

イエス・キリストの救いは、私たちに「神の愛」を与

えます。私たちは誰もが、誰かに愛され、誰かを愛したいという願いを持っています。それは、人が神によって、神のかたちに、神に似たものに造られたからです。聖書は「神は愛です」（ヨハネ第一 4:16）と言っていますが、人が神のかたちであるなら、「人は愛です」と言われてもよいでしょう。愛の神は、人が愛の心を持ち、愛の行いに生きるときに一番幸せになるように人を造られたのです。

愛といっても、様々な愛があります。親子の愛や兄弟姉妹の愛、男女の愛、夫婦の愛、また、友情などです。けれども、私たちは、神の愛を知るまでは、どの愛にも満足できませんでした。罪のために人間の愛が歪められているからです。本来、愛は無条件なものなのに、人間の愛は条件付きの愛になってしまいました。それは「だから」の愛や「もしも」の愛です。「あなたは素敵だから、賢いから愛する」、「もしも、億万長者だったら、私の言うことを全部聞いてくれたら、愛するのだけれど…」といったふうにです。

少し前まで、日本の女性は結婚相手の男性に「三高」を求めています。「高学歴、高収入、高身長」のことです。最近では「三優」だそうです。「家事や育児を分担してくれる家族に優しい人、浮気をしないで自分にだけに優しい人、仕事を頑張ってくれて給料を入れてくれる家計に優しい人」のことです。けれども、自分の条件に完全にならぬ人などどこにもいないでしょう。また、互いに要求だけを突きつけ合っていたら、夫婦だけでなくどんな

人間関係も壊れてしまうでしょう。

神の愛は、人間の愛と違って無条件の愛です。それは「にもかかわらず」の愛です。人が罪を犯して神に逆らった「にもかかわらず」、神の聖さ、正しさを汚している「にもかかわらず」、臆病で、気まぐれで、疑い深い「にもかかわらず」、神は、人を愛してくださいました。聖書はこう教えています。「私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(6-8節)キリストは正しくもなく、情け深くもない不敬虔な罪人を愛してくださいました。「まさか、あんな人が愛されるわけがない」と言われて当然の者を神は愛してくださいました。神の愛は「まさか」の愛だと言ってもよいでしょう。

エペソ 3:18-19に「すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように」とあります。「広さ、長さ、高さ、深さ」とあるように、神の愛、また、キリストの愛は「四次元の愛」です。「広さ」は愛の対象を指します。誰ひとり神の愛から漏れる人はないのです。「長さ」は、その愛が永遠のものであり、変わらないもので

あることを言っています。人の愛は、どんなに完全に近いものでも、永遠ではありません。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」（エレミヤ 31:3）と言われる神の愛の他、世には永遠不変の愛はありません。愛の「高さ」とは、神の愛が純粹で、気高いものであることを言っています。そして、愛の「深さ」とは、ご自分に背く者さえも愛してくださる、無条件の愛を指しています。神の愛は、私たちの罪深さにまさって深く、神から遠く離れた者にまで届くのです。

私たちはキリストを信じるまで、この愛を知りませんでした。しかし、イエス・キリストを信じた時、この神の愛が分かりました。知識として知ったというのではありません。体験したのです。ローマ 5:5 に「なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです」とある通りです。私たちは、それによってはじめて、本物の愛、変わらない愛によって愛されたいというたましいの奥底からの願いを満たされました。そして、この愛によって、神と人を愛することができるようになりました。キリストの救いは、私たちに、この神の愛を与えてくれました。

二、神との和解

第二に、キリストの救いは、私たちに神との「和解」をもたらしました。神との「和解」なしに、私たちは神のもとに行くことができません。罪が、神の聖さを汚し、神の正義を踏みにじり、私たちと神との関係を壊してしまっただからです。

ほとんどの人が「死んだら天国に行く」と考えていますが、それはそんなに簡単なことではありません。「天国」、それは「天の御国」を短くした言葉で、聖書で「天」は「神」のことですから、「天国」は「神の国」のことです。そこは聖なる神と、罪のない御使いたち、そして聖徒たち、正しい人々だけがいるところ、罪のない場所です。罪を持ったまま誰ひとり天国に行くことはできません。天国に罪があればそこはもはや天国でなくなってしまうからです。神は、罪人をも愛して天国に迎え入れたいと願っておられますが、私たちが持っている罪が処理され、罪によって壊された私たちと神との関係が修復され、回復されなければ、私たちは天国に入れられないのです。人々は、自分の罪を処理し、神に近づくために様々な努力をしてきましたが、そのどれも成功しませんでした。しかし、キリストの救いがこの問題を解決しました。しかも、それは、私たちが罪のために失ったものを回復しただけでなく、罪のために壊してしまった神との関係をも回復したのです。

それは9節と10節に書かれています。「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。」これはキリストの「贖い」のことを言っています。贖いは *redemption* と *atonement* というふたつの言葉

で表します。Redemption は、私たちが失ったものが取り戻されること、atonement は、私たちが損ねた神との関係が修復されることを表します。9 節の「キリストの血によって義と認められた」は redemption、10 節の「御子の死によって神と和解させられた」は atonement のことを言っています。

もう少し説明しましょう。人は、神に最も近い者として造られ、神の栄光にあずかる者でした。ところが、罪のために、神から与えられた正しさ（聖書では「義」）、聖さ、また、神の前での立場を失ってしまいました。ローマ 3:23 に「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」とあるように、神の栄光からほど遠いものとなりました。しかし、イエス・キリストは、私たちが失ったものすべてを、取り戻し、私たちを、義なる者、聖なる者、神の子どもとしてくださいました。ローマ 3:24 に「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」とあるとおり、この事はイエスが成し遂げてくださった「贖い」（redemption）によって実現しました。

しかし、redemption によって、私たちの罪の問題は解決されても、私たちが壊してしまった神との関係はまだ回復されていません。神の正義、神の聖さ、神の栄光が満たされなければならないのです。しかし、罪ある人間には誰一人、そのことが出来ません。それができるのは、イエス・キリストただおひとりです。

Atonement は旧約でよく使われる言葉で、日本語では「宥め」と訳されます。旧約時代、神との交わりを回復するため、宥めの供え物がささげられ、それは「和解のいけにえ」と呼ばれました。10 節で「もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら…」とあるのは、イエスが「宥めの供え物」、また「和解のいけにえ」となってくださったことを言っています。Atonement は at·one·ment と綴ります。one という文字が入っているように、それは、私たちと神とを「ひとつ」にしてくれるものです。キリストは、私たちが損ねた神との関係を回復し、私たちと神とをひとつにするためにご自身を献げてくださいました。それによって、私たちが神のもとに立ち返る道、天への道を切り開いてくださったのです。

三、喜びの生活

第三に、キリストの救いは私たちを「喜び」で満たしてくれます。11 節に「そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです」とあります。初代のキリスト者の特徴のひとつは「喜び」でした。イエスは「喜びなさい。喜びおどきなさい」（マタイ 5:12）と教え、パウロは「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」（ピリピ 4:4）と言い、ペテロも「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことの

できない、栄えに満ちた喜びにおどっています」(ペテロ第一 1:8)と書いています。キリストの救いは私たちに、喜びの生活、喜びの人生を与え、天の永遠の喜びへと導いてくれるのです。

「喜び」の反対は「悲しみ」だと思われていますが、聖書の教えから言えば、「喜び」の反対は「恐れ」です。「悲しみ」はやがて「喜び」に変わりますが、「恐れ」は「喜び」を消し去るからです。罪ある者は聖なる神の前に立つことができません。いつも、罪への罰に恐れていなければなりません。しかし、イエス・キリストは私たちの罪を赦し、義の衣を着せ、神の前に立たせてくださいました。自らが「和解のいけにえ」となって、私たちに神との和解をもたらしてくださいました。もう「恐れ」はありません。困難な状況に直面して、慌てることも、迷うこともあるでしょう。失敗をして、気落ちしてしまうこともあるでしょう。一時的に喜びが消えてしまうようなこともあるでしょう。けれども、キリストがくださる「喜び」は消えません。イエスが「あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません」(ヨハネ 16:22)と言われたとおりです。

ヨハネ第一 4:10に「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるので

す」とあります。この言葉は、きょうのローマ 5:6-11 を見事に要約しています。バプテスマのヨハネはイエスを指さして、「見よ。世の罪を取り除く神の子羊」と言いました。イエスは十字架の上でまさになだめの供え物となりました。「ここに愛がある」、イエスの十字架に神の愛があり、神との和解があります。この愛を受け入れましょう。この和解にやすらぎしましょう。その時、私たちは「恐れ」を追放し、「思い煩い」を捨て、神との平和に憩うことができ、そこから生まれる「喜び」に生きることができます。救いの道は「喜び」の道です。この道を進み、さらに大きな「喜び」へと導かれていきましょう。

(祈り)

父なる神さま、私たちの心は、キリストを信じる前、不安や恐れで一杯でした。表面では強がっていても、内面は、もろく、臆病で、惨めなものでした。しかし、イエス・キリストを信じたとき、あなたの愛が分かり、平安が与えられ、喜びが生まれました。キリストが、私たちの救いに必要なすべてのことをしてくださり、私たちのために、あなたとの完全な「和解」を成立させてくださったからです。様々なことで私たちの心が揺らぐとき、どうぞ、この事実に戻らせてください。あらゆることをここから出発することができるようにしてください。そして、日々を信仰の喜びによって歩む者としてください。主イエスのお名前です。

告白の力 ローマ 10:9-10

10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。

10:10 人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。

ローマ 3:23、6:23、5:8、10:9-10、10:13 の五つの箇所を使って救いの道を伝える方法があり、それは “Romans Road to Salvation” (ローマ人への手紙による救いの道) と呼ばれています。きょうはその4番目、ローマ 10:9-10 を学びます。

ローマ 10:9-10 は英語で “Romans ten nine ten” と言い、聖書の “TNT” だと言われています。“TNT” はダイナマイトに使われるトリ・ニトロ・トルエンという爆薬のことで、“Romans ten nine ten” も「ダイナマイト」のような力を持った言葉だということです。確かにそうで、ローマ 10:9-10 は神の救いの力を受ける方法を教えています。

一、十字架と復活

ローマ 10:9-10 は、まず、「神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださった」と言って、神の救いの力は、イエスの十字架と復活にあると教えています。

十字架はキリスト教のシンボルで、イエスが十字架で死なれたことは、誰もが知っています。しかし、なぜ、何のためにイエスが十字架で死なれたのかを知る人は少ないのです。福音書はそれを教えるために書かれ、マタ

イ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書のどれもが、四分の一以上のページを使って、イエスの十字架と復活を描いています。それで、福音のメッセージは「十字架のことば」（コリント第一 1:18）と呼ばれ、また、福音を語る人々は「復活の証人」と呼ばれたのです。

イエスをご自分が聖書が預言し、約束している救い主であると主張しました。それを数々の奇蹟によって証明したのですが、当時のユダヤの指導者たちはイエスを信じようとはしませんでした。逆に、イエスを亡き者にしようとしてしました。彼らは宗教裁判でイエスに死刑判決をくだしましたが、宗教裁判では人を十字架につけることはできません。それで、イエスをローマ総督のもとに連れていきました。総督ポンテオ・ピラトはイエスに何の罪も認めることができませんでした。人々の声に押し切られてイエスを十字架につけることを許しました。それで、イエスは宗教上のトラブルや政治的な思惑に巻き込まれ、不幸にも、志なかばにして、世を去ったのだと多くの人が考えるようになりました。

しかし、事実は違います。イエスには十字架を避ける力がありました。反対者たちや政治の力に負けたものではありません。イエスをご自分の意志で十字架に向かわれました。それは、私たちの罪をご自分の身に背負い、それによって私たちの罪を赦すためでした。

イエスの身代わりの死は、イエスが世に来られる千数百年前に、すでに預言され、具体的に示されてきました。出エジプトのとき、「過越の子羊」が屠られ、それ

によってイスラエルはエジプトの奴隷から救い出されましたが、神はそのとき、すべての人を罪の奴隷から救い出す「神の子羊」を約束しておられたのです。バプテスマのヨハネはイエスを指さして、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ 1:29）と叫びました。そして、イエスはその通り、過越の祭のときに死なれたのです。

イエスが来られる 800 年前、イザヤは救い主について「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた」と預言し、それは十字架によって、そのまま成就しています。イエスは全世界の人々のために、その血を流してくださいました。私たちはこの血によって罪をおおわれ、赦され、救われるのです。

イエスは十字架の上で死なれました。人は 20 パーセントの血液を一度に失うと出血性ショックを起こし死にます。30 パーセントになるとほとんど命は助かりません。50 パーセントなら完全に死にます。イエスの心臓は脇腹から槍で突かれ、そこから血と水がほとんどすべてとってよいほど流れ出しました。その死は、何人もの犯罪人を処刑してきたローマ兵によって確認されています。彼らが間違えるはずはありません。イエスの遺体は弟子たちによって葬られましたが、彼らもイエスの死を確認しています。イエスの死は疑う余地のないものです。

復活とは、死にかけていたが息を吹き返したということではありません。イエスは完全に死なれましたが、ご

自分の死によって、「死」そのものを死なせ、死に勝利して復活されたのです。イエスはひとたび死なれましたが、ふたたびよみがえられました。イエスはもう死ぬことのない栄光のからだによみがえったのです。そのようなことは歴史の中で一度もなかったことです。人類の歴史は、人が生まれては死ぬという繰り返しでした。創世記の「アダムの系図」には「こうして彼は死んだ」という言葉が8回も繰り返されています（創世記5章）。人は皆、アダムの子として、「こうして彼は死んだ」「こうして彼女は死んだ」と言われて人生を終わります。しかし、キリストにある者は違います。イエス・キリストが復活されたように、やがて栄光のからだに復活するのです。罪からの救いを与えてくださったイエスは、罪の結果である死からの救いをも与えてくださるのです。イエスが復活されたのは、私たちの復活のさきがけとなるためであり、それを保証するためでした。そればかりでなく、イエスの復活のいのちは、信じる者のうちに今、働いて、信じる者を新しい存在にし、地上の人生を力強く生き抜く力を与えるのです。イエス・キリストの十字架と復活、ここに救いがあります。

二、信仰

ある教会のイースターの案内に「イエス・キリストは十字架から三日目によみがえったと言われています」と書いてありました。私はそれを読んで、驚き、またがっかりし、憤りさえ覚えました。「キリストは…よみがえったと言われています」ではなく、「キリストは…よ

みがえりました」と書くべきだからです。クリスチャンでない人たちがそういうのはしかたがないとしても、教会はイエス・キリストの復活の証人で、人々にキリストの復活を知らせなければならないのです。復活の事実を信じればこそイースターを祝い、毎週日曜日、イエスの復活の日を記念して礼拝に集まり、「小さなイースター」を祝っているのです。信仰は事実に基づきます。

「復活があったかどうかは分からないけど、そう言われているから、そういうことにしておきましょう」というのは信仰ではありません。使徒パウロは「そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです」（コリント第一 15:14）と言っています。信仰の土台は歴史の事実です。もし、キリストの十字架や復活がたんなる物語で事実でないなら、そこにいくら意味付けをしても、私たちに救いはないのです。パウロはこうも言っています。「そして、もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。…もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で、一番哀れな者です。」（同 15:17、19）しかし、事実、キリストは復活されました。イエスは復活によって、私たちの罪が十字架によって赦され、神の前に正しい者とされていることを確かなものとされたのです。

それで、ローマ 10:9-10 は「あなたの心で神はイエスを

死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われる」と告げているのです。ローマ 4:25 にも「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられた」とあります。十字架と復活を「信じる」とは、たんに十字架と復活という出来事があったことを認めるだけではありません。それが「私たちの罪のため」であり、「私たちが義と認められるため」であることを知って、その罪の赦し、救いを受け取ることです。イエスの十字架と復活は、「イエスは十字架で死なれたそうですね。おかわいそうでしたね。でも、復活されたそうですね。それはよかったですね」と言って済まされるものではありません。十字架と復活の事実は、それがこの私のためであったことを知って、イエス・キリストを信じ、受け入れる信仰を私たちに求めています。十字架と復活による救いは、信仰を通して私たちにのところに來る。私たちのところに來て、私たちのうちに働くのです。

三、告白

ローマ 10:9-10 は信仰と共に、告白を教えています。順序としては心に信じてから口で告白するのですが、ローマ 10:9-10 は、「口で…告白し、心で…信じるなら、あなたは救われる…人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われる」と言って、心に信じることと口で告白することとを、別々のものではなく、ひとつのことと見ています。心で信じるなら、それは必ず口に上るはずであり、口で告白することによって、さらに心に堅く信じる

ことができるからです。

人にもよりますが、たいていの人は心の中にあることを黙ってはいられないものです。それが辛いことであれ、嬉しいことであれ誰かに話したいのです。誰も聞いていなくても、ついひとりでつぶやいたり、叫んだりしてしまうことがあるでしょう。神が私の罪を赦してください。正しい者と認めて受け入れてください。神の子どもとして愛を注いでください。それを聞いて、知って、分かって、黙っていることはできないはずです。「神さま、私の罪を赦してください。御国に受け入れてください」と心で祈るだけでなく、実際に声を出して、「イエスさま、あなたは救い主です。主です」と叫びたくなるのです。心にある信仰は、告白となって唇に上るものなのです。

しかし、どのような言葉で、信仰を言い表わせばよいのでしょうか。じつは、「告白」は、もとの言葉で「ホモロゲオー」と言い、それには「同じことを言う」という意味があります。何と同じことを言うのでしょうか。神の言葉とです。神の言葉が「すべての人は罪を犯した」と言うので、私たちも「私は罪を犯しました」と告白するのです。神の言葉が「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」と言うので、私たちも「私を死から救い出し、永遠の命を与えてください」と願うのです。

信仰を告白する言葉は、聖書に数多くありますが、そ

のひとつはピリピ 2:6-11 です。「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主である』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」ここに「イエス・キリストは主である」という言葉がありますが、これは、信仰告白の要約の言葉です。その前後の言葉にあるように、「イエスは私たちの罪のために十字架で死なれた救い主キリストです。復活し、天に昇り、御座に着き、すべてを治めておられる主です」という意味が、「イエス・キリストは主です」という言葉に含まれています。

「イエス・キリストは主である」をもっと短くしたのが「イエスは主です」という言葉です（コリント第一 12:3）。ローマ 10:9-10 は、この一番短い告白の言葉「イエスは主です」を取り上げて、「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白するなら救われる」と言っています。みなさんは、いつその告白をしましたか。私は、伝道集会のあと教会の執事の方に導かれ、その人が与えてくれた言葉の通り、「私はイエスさまを私の救い主と信

じます」と祈りました。その日のことは長い年月の経った今も、昨日のここのようにして思い起こすことができます。

最初の告白以来、私たちは礼拝に集まって「イエスは主です」と告白し続けています。礼拝では、他の人々と一緒にひとつの心、ひとつの言葉で、共に「イエスは主です」と告白します。そして、礼拝を終えてそれぞれの場所に遣わされていくときも、「イエスは主です。わたしの主です」と告白し続けるのです。心に信じるものが、素直に口に上ってくる、それが証しとなり伝道となるのです。信仰の告白は、自分を救うだけでなく、その告白に触れる人々をも救います。信仰の告白にはダイナマイトのような大きな力があります。この週も、その告白の力を見せていただきましょう。「心に信じ、口で告白する。」これが救いの道です。この道を歩みましょう。

(祈り)

真実な神さま、あなたは「イエスは主である」と信じて告白するなら救われると、救いの道をはっきりと示してくださいました。これ以上に明確な救いの道はどこにもありません。御言葉の通り、心に信じ、口で告白してあなたに伝えていく私たちとしてください。私たちの救いのために十字架で死なれ、三日目によみがえられたイエス・キリストのお名前です。

進化論はダーウィン以前からありましたが、ダーウィンはガラパゴス諸島の動物の観察から、「生物は自然選択によって、環境に適応するように進化していく」という説を導き出しました。環境の変化により、生物の中のある種類のものも多く死ねば、その遺伝子情報が失われ、生き残った種類の遺伝子情報だけが伝えられるようになります。しかし、それだけでは、ある種類の生物から別の種類の生物へと「進化」したという結論を導き出すには無理があります。ある種から別の種へと進化したというよりは、その種が絶滅したとするほうがより論理的です。進化の証明には化石や、生物の形態や DNA 配列が似ているということなども「証拠」とされますが、ひとつの生命体から進化して、今日あるすべての生物になったとするには、無理があります。

しかし、多くの人々が、進化論とは何かを理解しないまま、進化論が世界と人類の起源を教える唯一のものであり、人生も社会も、「進化」という逆らうことのできない法則によって導かれていると「信じる」ようになりました。いつしか、進化論という「科学」が「神」となったのです。日本では、学校で進化論だけが教えられ、NHKの番組では、何かというと「進化」が持ち出されず。その結果、多くの日本人の間では、「星占い」や「運勢判断」などが真面目に信じられているのに、聖書の「創造」は一笑にふされるようになりました。「進化論」の呪縛から解放され、創造主を受け入れるよう教え導くことは、日本人に福音を伝えるためには、なくてはならないことのように思います。



Penguin Club

www.penguinclub.net